

「頼む・・・マスター・・・」

ポーカーフェースを崩した時、ルシファアの顔は一気に本音に染まった。

額からは冷や汗がたれ彼がゴールドヘルファイアイモリ・シロップの媚薬効果に耐えているのがよく分かった。

「ルシファア・・・!!」

伊吹は慌ててルシファアの額に流れる汗を拭くと心配そうに顔を覗き込んだ。

近くで見るとルシファアの顔は想像以上に苦しそうなのがよく分かる。

ただ眼だけはしっかりと伊吹を捕らえまるで飢えた獣のようだった。

「早く・・・早く俺に命令をしてくれ・・・」

眉間にしわを寄せるその顔はまさしく苦悶の表情で、普段の冷静で余裕のある表情とは真逆だった。

(命令って言われても・・・)

ここに来るまでの間の人の兄弟たちの解放をしてきたからある程度予想はしていたが、目の前にいるルシファアの様子はあまりにも他の兄弟たちとは違い、伊吹はその違いに戸惑った。

サタンとベルゼブブ以外では身の危険は一切感じなかったし、すでに情報として伊吹に命令されれば解除されるということが伝わっていたおかげで作業は物凄くスムーズに行っていた。

なのに、一番平気そうだと他の兄弟たちから言われていたルシファアがこれである。

（完全に油断をしていた！）

ルシファアはもう自分の力で体を支えるのも難しいのかもたれかかるように伊吹の肩にしがみついている。

息も荒く、理性で無理やりゴールドヘルファイアイモリ・シロップ強力な媚薬効果を押さえ込んでいるのが外見からも明らかに分かった。

（命令・・・命令・・・！）

伊吹は頭が真っ白になってしまったが、何とか必死にルシファーにできる命令を考えた。

「あ！ルシファー！？」

よいよ自分で自分の体を支えることができなくなったのか、伊吹の肩からルシファーはずると落ち床に倒れた。

「ルシファー！えっと・・・こんな時だれに頼めばいいんだろう・・・」

サタン？ベルフェゴール？マモン？

浮かんでは消え、浮かんでは消える兄弟たちの中で唯一ルシファーに対して敵意を持っていないベルゼブブの顔が思い浮かぶと、伊吹はポケットからD.D.Dを取り出しベルゼブブに電話をかけた。

『なんだ？』

「あ？ベル？実は今ルシファーの・・・」

そう言いかけた次の瞬間、伊吹のD.D.Dは横から取り上げられ終話ボタンが押された。

恐る恐る横を見ると、手の主はルシファー。

「どこに電話をしている？」

顔は見えなかったが先ほどまで苦悩の表情を浮かべていたとは思えないような冷静な口調に、伊吹は逆に怖さを感じ逃げようと身をひるがえそうとした。

しかし次の瞬間ルシファーの腕にがちりと腰をつかまれ床に転がされた。

見上げるといつもと同じルシファーの顔がそこにはあった。

あったのだが、伊吹の目には違和感しかなかった。

そもそもルシファーはまだ伊吹から命令されていない。

すなわちまだゴールドヘルファイアイモリ・シロップの媚薬効果が全身に回っているはずだったのだが、先ほどまで苦悶の表情を浮かべ必死に抵抗していたのがこんなにも早く冷静になるとは思えなかった。

(絶対何かがおかしい)

直感としか言いようがないものが警告しているが、伊吹は四つん這いになって体を抑えるルシファーがいるせいで逃げることができなかった。

「どこに電話をしていた？」

「ベール……」

「どうしてだ？」

「ル・ルシファアが倒れちゃったから、一番嫌っていないのを選んだ！ベールだったらルシファアのこと嫌いじゃないし、助けてくれるかもしれないと思っ  
て！」

「なるほど……」

ルシファアは伊吹の D.D.D をソファアの方に滑らせた。

「しかしそれには用事がない」

ルシファアの指が伊吹のブラウスの襟元をつかんだと思うと突然引き千切った。

突然のことに驚いているとブラジャーを乱暴に持ち上げ乱暴に愛撫を始めた。

「ルシファア！」

「うるさい」

抱き上げられキスをされると自分の口の中にルシファアの舌が侵入してくる感覚がした。

しかしその感触は交換留学生の最終日に体を重ねた時のように思いやりと配慮が加わったものではなく、ただ自分が満足するためだけの口づけ。

伊吹が抵抗できず必死に鼻で呼吸をしている間、ルシファアの手は胸を乱暴に愛撫しこれでもかと伊吹に痛みと不快感を与えてくる。

唇が離れ伊吹は再び自分の体が床に倒された感覚がした。

ルシファアの口は伊吹の胸を噛みつき始め、片方の手はもう片方の胸を愛撫している。

もう片方の手が自身の股間に延ばされているのを感じ、伊吹は必死になってルシファアをはがそうとしたが体形があまりにも違い過ぎてどうにもならない。

「ひゃ！」

ショーツ越しに性器に触れられ、思わず変な声を上げた。